

事例5 中学校における通常学級と特殊学級の中間的な学級である 特別支援教室での生徒への対応について

I. はじめに

当校は、I市J地区の中心的位置に存在している、生徒数500余名の中規模中学校です。幅広い校区（6小学校区）をもっており、古くからの文教地区である一方で新興住宅街も併せ持っている地域です。例年、全国や県の平均を上回る不登校生徒がおり、不登校対策が常に教育の最重要課題となっています。過去4年間の不登校発生率は、平成13年度が4.7%、15年度が3.74%、15年度が3.72%、そして16年度が3.9%と推移しています。そういった実態から、当校では早くから不登校生徒のための「適応指導学級」が存在していました。何らかの理由で所属学級で活動ができない生徒が、居場所がないという理由で登校できずに欠席となることを防ぐための「緊急避難場所」として設置された経緯があります。教員の負担増加をある程度覚悟で、全職員の体制でこの適応指導学級を運営し、十分とは言えないまでも、これまで学習の補充や学校生活適応に向けた支援対策を講じてきました。

平成17年度の体制作りを見直す際、前年度まで当学級を利用していた生徒がすべて卒業したこともあって、この「適応指導学級」の在り方を検討することとなりました。特別支援教育においてI市の巡回相談が充実したこともあって、校内において「特別な支援を必要とする生徒」の支援対策への意識が高まってきました。その中には軽度発達障害のある生徒はもちろん、不適応生徒等、集団生活に適応しづらい生徒を対象とし、彼らのニーズに合わせた教室を検討することとなりました。特殊学級とは違う、しかし通常学級とは果たす機能が異なる中間的な学級としての効果的な運営を試みました。

II. 「特別支援教室」の設置について

平成17年度、新しい支援体制をもつ教室の設置に当たり、次のような計画で始めることとなりました。

(1) ねらい

- ①何らかの理由で所属学級・学年の一斉授業や活動への参加が難しい、もしくは補充的な支援が必要な生徒のために、学習等の活動ができる場や居場所を確保する。
- ②上記生徒の学習補充や集団生活への適応、所属学級や授業への復帰、生活の自立に向けて支援に当たる。

(2) 対象生徒

- ①学校生活に不適応を示し、所属学級での生活が困難である生徒（不登校・学校不適応生徒）
- ②通常学級に所属しているが、軽度発達障害等で何らかの特別な支援が必要な生徒

(3) 指導・支援体制

- ①利用する個々の生徒について「個別の指導計画」「支援・援助シート」を作成する。
- ②学習支援体制については、利用者の有無に関係なく、年度始めから時間割の全コマに職員を配置する。（職員の持ち時数と支援教室での指導教科のバランスを考慮して配置）【資料1参照】
- ③利用生徒の所属する学級とのつながりを切らないよう、学級担任との連絡を密にする。活動の記録簿を作り、活用する。【資料2参照】
- ④その生徒にとって効果的な指導ができるよう、担当者会や職員の研修を行う。

2学期末現在における利用の実際を紹介します。

利用者は現在4名（1年生男子1名，2年生男子1名，3年生男女各1名）ですが，3学期以降2名追加される予定です。そのうち2年生男子生徒Kは，日本語を母国語としない外国からの帰国子女で，その生徒については「教科指導の補充」ではなく「日本語習得支援」を行っています。また，3年女子生徒Lに対しては，毎日早退を繰り返す不適応生徒であるため，特別支援教室を利用することで学校での活動時間を少しでも長くなるような「居場所的」役割を果たしています。3年男子生徒Mは特殊学級に所属していますが，普通高校進学という希望から，学習補充強化の目的で利用しています。1年男子生徒Nについては，軽度発達障害の疑いがあり，通常学級における一斉指導形態の学習だけでは困難が生じてきたために2学期以降，利用するようになりました。

それぞれの生徒に対してニーズが異なるため，特別支援教室を求める生徒が増えれば増えるほど，個への対応が難しくなってきます。人員配置の工夫をしても限界があります。現在資料1にあるようにどの時間を利用していても教師は配置されていますが，そこで指導できる内容が必ずしも利用者の求めているものとは限らないことが課題です。例えば，Kについて言えば，所属学級（普通学級）における社会は説明が難しく，黒板の字も漢字が多いので，この時間帯に特別支援教室を利用しようと考えます。しかし，特別支援教室の時間割は，Kの必要とする社会の補充学習や日本語支援の時間とは限らないのです。もともと日本語習得教育を専門的にやることのできる教員はいないので，国語科教師を中心として，Kが利用できる時間帯に当たった教員が，何とか指導をしているのです。幸いなことにI市教育委員会を通して，市の国際交流課の指導員を2人派遣してもらうことができました。外部の指導員の方を中心として，日本語習得教育のカリキュラムを組み，担当者会議を何度か開いて試行錯誤の中で取り組んでいます。

また，1年生の男子生徒Nについては，通常の学級では「集中できない」「黒板を書き写す作業が大変遅い」「特に英単語が覚えられない」という実態があるため，そこから「落ち着いて黒板を書き写すような活動」や「英単語が覚えられるような学習」を支援教室に期待することになります。

時間割の調整を工夫して，何とか英語科教師が特別支援で指導できるようにしたもの，「彼の障害の特徴から，どのようにすれば実際に英単語を覚えていくことができるのか」分からず，実際的な効果を上げていくのは難しい状況です。彼の場合，小学校の時に通級していた学級の担当者と中学校側で入学当初から情報交換等連携を深めていたので，2学期に再びその担当者と連絡を取り合い，アドバイスをいただくこととなりました。

当校には，特別支援教室を利用しない軽度発達障害の生徒も存在します。I市の巡回相談の際に継続的に相談し，校内のコーディネーターを通じて担当相談員から具体的指導策をいただいています。一斉指導形式の授業でも工夫できることを具体的に示してもらい，それを，該当生徒の教科担任が共同歩調で取り組んでいます。例えば，黒板の書き写しが苦手であれば，「重要語句だけでも書くよう，そこを赤く囲む」，など特別支援教室利用者も同様，通常学級においても，教科指導を担当する者が少し工夫をすることで，学習がスムーズにいくようにしています。

Ⅲ. 中学1年生が学校生活に適応するための対策について

当校では、特別な支援が必要な生徒の中には、不登校や学校不適應の生徒も含まれます。特に中学校では、中学1年生でいじめや不登校が増加するという現状があります。不登校・学校不適應になってしまった生徒のケアをどのようにするかといった、対処療法的な方策ももちろん大切ですが、どのようにしたら中学1年生のいじめ発生を防ぎ、不登校生徒を無くすることができるのかといった、予防策も大切になってきます。そこで当校では、次のような点に特に着目して実践を展開しています。

(1) 思春期を迎えた中学生の繊細な内面へのきめ細かな対応を実践

(ロ) 複数の目で観察し、チームで即時対応ができるような情報集積方法の工夫

(リ) 目にみえない心の状態を把握するための様々なアンケートの実施

(ハ) 生徒とのやりとりを通してレポートを収めることを目的とした「内省ノート」記録の実施

(ロ)では、教科担任制である中学校は学級担任が把握しきれない授業の様子や部活動の様子を書き込むチェックシートを作成したり、情報が一元化出来るように情報入力ファイルを校内のサーバー上に保存したり、一人一人の情報を集約できるような個票を作成したりしています。パソコン内に情報を集約することについては、活用における便利さと同時に、情報の保護についても十分に検討しています。(リ)では、毎月末にストレス度や学級適應感を測るアンケートを実施しています。これはかなり生徒の内面把握に役立っており、実際それをもとに教育相談をすることで、生徒の不適應状態の深刻化を回避できていると評価しています。小中が連携を図り、子どもの社会的スキルを測るアンケートも行っています。スキルが低く、特に心配される生徒についてはより丁寧に観察をし、適切な支援を考えるようにしています。(ハ)の内省ノートでは、言葉を介して自分の気持ちを表現できない生徒には特に効果をあげています。ノートを通して悩み多き中学生の声を聴き取ることで、その子の悩みに寄り添うことができています。学級経営上においても生徒の人間関係が把握でき、効果を上げています。

(2) 小中が連携を図り、9か年を見通して子どもたちを育てる体制を確立

(ロ) 小学校から中学校への引き継ぎ資料を共通にする

(リ) 小学生が中学校生活をイメージでき、抵抗感を少なくする工夫

(ハ) 校区内の小学校間、及び小中間が連携して人間関係作り能力を育成する

(ロ)については、「マイナスの部分を含め、中学校に与えることで、子どもを色めがねで見るのではないか」という小学校側の心配もあるようですが、特に不登校という現象は、小学校時代の様子が大きく参考になることが実証されています。このように大切な情報を受け取らずに一から対応する危険よりは、より多くの情報を受け取り、受け取る中学校が偏見をもたないよう肝に銘じて対応する方がはるかに効果があると思われれます。その点を小学校によりよく理解してもらい、来年度からは情報の伝達がスムーズに行く予定になっています。(リ)の具体的実践としては、体育祭に生徒会が6年生を招待したり、3学期に中学1年生が6年生に入学説明会を行ったり、英語科教師が小学校に出前授業を行ったりしています。(ハ)については不適應の原因のひとつにもなりうる人間関係作りができないためのトラブルを減らすために、重要な課題です。中学校では、各小学校で実践されてきたものを十分把握した上で、新しい人間関係をスムーズに構築できるような活動を教育課程の中に盛り込んでいます。

Ⅲ. 中学1年生が学校生活に適応するための対策について

当校では、特別な支援が必要な生徒の中には、不登校や学校不適應の生徒も含まれます。特に中学校では、中学1年生でいじめや不登校が増加するという現状があります。不登校・学校不適應になってしまった生徒のケアをどのようにするかといった、対処療法的な方策ももちろん大切ですが、どのようにしたら中学1年生のいじめ発生を防ぎ、不登校生徒を無くすることができるのかといった、予防策も大切になってきます。そこで当校では、次のような点に特に着目して実践を展開しています。

(1) 思春期を迎えた中学生の繊細な内面へのきめ細かな対応を実践

(ロ) 複数の目で観察し、チームで即時対応ができるような情報集積方法の工夫

(リ) 目にみえない心の状態を把握するための様々なアンケートの実施

(ハ) 生徒とのやりとりを通してレポートを収めることを目的とした「内省ノート」記録の実施

(ロ)では、教科担任制である中学校は学級担任が把握しきれない授業の様子や部活動の様子を書き込むチェックシートを作成したり、情報が一元化出来るように情報入力ファイルを校内のサーバー上に保存したり、一人一人の情報を集約できるような個票を作成したりしています。パソコン内に情報を集約することについては、活用における便利さと同時に、情報の保護についても十分に検討しています。(リ)では、毎月末にストレス度や学級適應感を測るアンケートを実施しています。これはかなり生徒の内面把握に役立っており、実際それをもとに教育相談をすることで、生徒の不適應状態の深刻化を回避できていると評価しています。小中が連携を図り、子どもの社会的スキルを測るアンケートも行っています。スキルが低く、特に心配される生徒についてはより丁寧に観察をし、適切な支援を考えるようにしています。(ハ)の内省ノートでは、言葉を介して自分の気持ちを表現できない生徒には特に効果をあげています。ノートを通して悩み多き中学生の声を聴き取ることで、その子の悩みに寄り添うことができています。学級経営上においても生徒の人間関係が把握でき、効果を上げています。

(2) 小中が連携を図り、9か年を見通して子どもたちを育てる体制を確立

(ロ) 小学校から中学校への引き継ぎ資料を共通にする

(リ) 小学生が中学校生活をイメージでき、抵抗感を少なくする工夫

(ハ) 校区内の小学校間、及び小中間が連携して人間関係作り能力を育成する

(ロ)については、「マイナスの部分を含め、中学校に与えることで、子どもを色めがねで見るのではないか」という小学校側の心配もあるようですが、特に不登校という現象は、小学校時代の様子が大きく参考になることが実証されています。このように大切な情報を受け取らずに一から対応する危険よりは、より多くの情報を受け取り、受け取る中学校が偏見をもたないよう肝に銘じて対応する方がはるかに効果があると思われれます。その点を小学校によりよく理解してもらい、来年度からは情報の伝達がスムーズに行く予定になっています。(リ)の具体的実践としては、体育祭に生徒会が6年生を招待したり、3学期に中学1年生が6年生に入学説明会を行ったり、英語科教師が小学校に出前授業を行ったりしています。(ハ)については不適應の原因のひとつにもなりうる人間関係作りができないためのトラブルを減らすために、重要な課題です。中学校では、各小学校で実践されてきたものを十分把握した上で、新しい人間関係をスムーズに構築できるような活動を教育課程の中に盛り込んでいます。

IV. 教育的な効果と残された課題

当校では、学校生活に適応できる生徒を育成し、いじめや学校不適応を出さないための予防策を積極的に推進することと、一方で不適応になってしまったり、様々な理由で学校生活において特別な支援が必要な生徒への対応策を検討することが大きな二本柱となっています。両者が同時に推進されることで教育的な効果は大きく、成果を上げていると考えています。実際のところ、昨年度まで県の平均を大きく上回る不登校数が、今年度は県の平均以下に減る見通しです。平成13年度には不登校数28名（うち1年生8名）だったのが、今年度は9名（うち1年生は2名）になる見通しです。特に中学1年生に関しては、上記で述べた「1年生が学校生活に適応する対策」を講じるようになってから激減しました。不登校の2名は小学校からの継続であり、中学校で新たに不登校になった生徒ではありません。この2名についても、小学校の頃より登校状況は改善されています。また、特別支援教室が設置されていることで、不適応傾向の生徒も家にひきこもるなど全欠状態にはならず、この教室での活動を基点に、学校生活を展開させることができます。不適応生徒の子どもは、この教室を共に利用している様々な生徒がいるおかげで、少数ながらもその中で新しい人間関係を構築し、そこから学ぶこともあるようです。

いわゆる「特別支援教育」の対象として通常学級に在籍する軽度発達障害をもつ生徒への支援については課題が多く残っています。まず、職員が軽度発達障害を的確に把握することが困難であるという点があります。何度となく職員研修を設け、学習はしているものの、個々によって障害の程度が異なり、それを指導に生せるように実態把握ができるかどうかは難しいことです。しかしそれをしないと特別支援教室の運営は「ハード面は整ってもソフト面が不十分」となってしまいます。本人や保護者が期待して、この特別支援教室を利用している以上、ある程度形となって効果が現れてこなければ説明責任を果たせないこととなります。質的レベルをあげるためには、核となる職員（特別支援教育の校内コーディネーターや特殊教育担当者等）を中心として教員が丸となって取り組まなければいけません。そして、校内だけでは不十分であれば、外部の専門機関とも連携を十分に図る必要があります。来年度は、核となる職員を中心とした組織を作り上げ、その点を実現させて行く予定です。

中学1年生のいじめや不登校の解消を目指した実践については、「心配される生徒」を支えるシステム作りが中心となってきましたが、今後は「学校生活に適応できる」ほとんどの生徒の適応感を高め、全体の底上げを図りたいと考えています。うまく適応できると思われる生徒でも、環境によっては思春期の揺れと重なって不安定な状態に陥ることは誰にでもありうることです。それを学年という集団全体で、好ましい人間関係作りの力を育成することで、1人でも多くの生徒が適応できるような方策を検討していくのです。当校に勤務するスクールカウンセラーの力も借りて、人間関係能力育成のためのスキルアップカリキュラムを年間の見通しで立て、実践していく予定です。

資料1 特別支援教室利用状況

()内は、担当教員の氏名

	月	火	水	木	金
朝学活					
1限	自学(〇〇) 2-6(日本語)	自学(△△) 2-6(日本語)	理科(□□) 3-6(理)	社会(△△) 2-6(日本語)	自学(△△) は1(数)
2限	自学(△△)	国語(〇〇)	英語(〇〇) 3-6(英) は1(数)	数学(□□) は1(数) 3-6(数)	社会(△△) 3-6(社)
3限	自学(〇〇) 3-6(自) 2-6(日本語) ※外部講師	自学(〇〇) 2-6(日本語) ※外部講師	自学(〇〇) 2-6(日本語)	数学(□□)	英語(〇〇) 3-6(英)
4限	英語(〇〇) 1-7(英)	英語(〇〇) は1(英) 3-6(英)	国語(〇〇) 2-6(日本語)	自学(〇〇)	理科(□□)
給食					
5限	社会(□□) 2-6(日本語)	社会(△△) 1-7(数)	自学(〇〇) 1-7(英)	自学(〇〇)	国語(〇〇) 2-6(日本語) ※外部講師
6限		国語(〇〇) 2-6(日本語)	国語(〇〇)		自学(〇〇)

※ 月曜3限と水曜2限は教室を2分して利用する。(担当者が2人いるため)

※ Kの学習はすべて日本語学習とするが、必要に応じて教科補充をする。

資料1 特別支援教室利用状況

()内は、担当教員の氏名

	月	火	水	木	金
朝学活					
1限	自学(〇〇) 2-6(日本語)	自学(△△) 2-6(日本語)	理科(□□) 3-6(理)	社会(△△) 2-6(日本語)	自学(△△) は1(数)
2限	自学(△△)	国語(〇〇)	英語(〇〇) 3-6(英) は1(数)	数学(□□) は1(数) 3-6(数)	社会(△△) 3-6(社)
3限	自学(〇〇) 3-6(自) 2-6(日本語) ※外部講師	自学(〇〇) 2-6(日本語) ※外部講師	自学(〇〇) 2-6(日本語)	数学(□□)	英語(〇〇) 3-6(英)
4限	英語(〇〇) 1-7(英)	英語(〇〇) は1(英) 3-6(英)	国語(〇〇) 2-6(日本語)	自学(〇〇)	理科(□□)
給食					
5限	社会(□□) 2-6(日本語)	社会(△△) 1-7(数)	自学(〇〇) 1-7(英)	自学(〇〇)	国語(〇〇) 2-6(日本語) ※外部講師
6限		国語(〇〇) 2-6(日本語)	国語(〇〇)		自学(〇〇)

※ 月曜3限と水曜2限は教室を2分して利用する。(担当者が2人いるため)

※ Kの学習はすべて日本語学習とするが、必要に応じて教科補充をする。

資料2 平成17年度 特別支援教室対応記録表 (第4期)

月 第 週 (/ /) ~ (/ /)

★記入内容：学習の内容と生徒の様子（簡単に）

	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()
朝学活					
1時限	自学 2-6 (日本語)	自学 2-6 (日本語)	理科 3-6 (理科)	社会 2-6 (日本語)	自学 はば1 (数学)
2時限	自学	国語	英語 はば1 (英語) 3-6 (英語)	数学 はば1 (数学)	社会 3-6 (社会)
3時限	自学 3-6 (自) 2-6 (日本語) ※外部講師による指導	自学 2-6 ※外部講師による指導	自学 2-6 (日本語)	数学	英語 3-6 (英語)
4時限	英語 1-7 (英語)	英語 はば1 (英語) 3-6 (英語)	国語 2-6 (日本語)	自学	理科
給食					
5時限	社会 2-6 (日本語)	社会 1-7 (数学)	自学 1-7 (英語)	自学	国語 2-6 (日本語) ※外部講師による指導
6時限		国語 2-6 (日本語)	国語		自学
終学活					

連絡事項

検印	校長	教頭	適応主任	特支主任 担任1	生徒指導 主事	担任2 ()	担任3 ()	担任4 ()
----	----	----	------	-------------	------------	------------	------------	------------